

巻頭言

大塚キャンパスのリニューアル:哀惜と期待



阿部生雄

附属学校教育局長
筑波大学理事



東京教育大学の旧貌を伝える現在の「E館」と「G館」が、装いを新たに附属学校教育と生涯学習の拠点に生まれ変わろうとしている。この現在の建物は、私が学生の時代には未だ「新館」と呼ばれていた当時、そこには文学部と教育学部が日本のアカデミアの一角を占めていた。現在、教育の森公園と文京区スポーツセンターのある所には、昭和初期の雰囲気伝える理学部の「W館」や図書館、そして運動場があった。東京高等師範時代の面影を宿す建物は、今や僅かに附属小学校の堅固な本体部分（有形文化財指定の建造物に登録する価値があると思うのだがどうであろうか）にしか見出せなくなった。

東京教育大学の筑波移転に伴い、ここ大塚地区のキャンパスは、昭和53年4月に設置された筑波大学学校教育部が所轄する「東京キャンパス」の一つとして、社会人向けの夜間大学院などとして利用されてきた。平成16年には国立大学法人法により国立大学法人筑波大学が設置され、学校教育部は附属学校教育局として機能が強化された。また、平成19年には各障害の附属学校は特別支援学校に改称された。現在、教育局は11の附属学校、理療科教員養成施設、特別支援教育研究センターを統括し、その他に夜間大学院や放送大学がこの施設を利用している。

今後、附属学校教育局、人間総合科学研究科やビジネス科学研究科等の夜間大学院、理療科教員養成施設、法科大学院、放送大学（東京文京学習センター）、そして共用・地域開放の図書室が地下1階、地上6階の建物に収まる。それぞれの組織が融通し合い、また協力して作り上げる附属学校教育と生涯学習教育の拠点となる。この新たな拠点に、世界に誇示できる日本の教育と学問をリードするアカデミアを誕生させたいものである。

目次

■巻頭言

大塚キャンパスのリニューアル:哀惜と期待

●阿部生雄

■ご挨拶

退職のご挨拶 ●篠原吉徳、西川公司 1
●柳本雄次、新井邦二郎 2

■大塚キャンパス改築

キャンパス・リニューアルを迎える附属学校教育局 ●江口勇治 2

■「科学の芽」賞

朝永振一郎記念
第4回「科学の芽」賞の授賞式・発表会開催! ●小林 汎 3

■国際教育・国際交流

国際教育・国際交流のこの1年 ●坪田耕三 3

■この指とまれ

「ぼくの宝物だよ!」—新しいタイプの交流で得た宝物— ●小山浩平 4

■新任教員奮闘中

教員になり2年目、日々勉強です ●本間貴子 4

■附属の今

附属高等学校 ●鎌倉芳信 5

■附属の新しい波

附属の新しい波～普通附属と特別支援の連携の試み～ ●小林 汎 5

■TOPICS

平成21年度 筑波大学附属学校研究発表会 6
平成21年度 筑波大学附属学校教育局春期研修会 6

●広報紙名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia（後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む）こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名（Paulownia imperialis）に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。



退職のご挨拶

Congratulation

附属学校教育局

教授 篠原吉徳



附属久里浜特別支援学校

校長 西川公司



私は、昭和21(1946)年生まれですので、いわば、全身の骨の髄まで、教育基本法の根本精神を叩き込まれて、育ってまいりました。その教育基本法が、改正されました。平成18(2006)年のことです。そして、翌平成19(2007)年には、学校教育法の改正があり、100年を超える歴史を誇った「特殊教育」は幕を閉じ、「特別支援教育」の扉が開かれました。我が国の教育にとって、これらの時代を画する大きな出来事（5年、10年のサイクルで起こるようなことではありません）に、偶然にも出くわすことになりました（これらの出来事を目の当たりにしたことは、単なる僥倖とはいえ、私には自慢できることです）。私は、平成6年、筑波大学に思いがけずに採用されました。それ以前には、筑波大学で働くなどということは、考えてもみないことでしたが、さらに、私が予想だにできなかった、それゆえ、私を一層驚かせることになったことが、筑波大学の教員として着任して以後、相次ぎました。インテグレーションは乗り越えられ、いや、我が国は、これを経験せずに一気にインクルージョンに突入したことも、意外外の、驚嘆したくなるような、出来事でした。このような中、附属学校教育局で仕事できたことは幸せでした。世の中の変化に翻弄されることもなく、また、時の流れに取り残されることもなく、今日までこられたのは、教育長をはじめ、附属学校教育局のスタッフの方々、さらには、事務職員の皆さまに支えられたおかげ、と深く感謝しています。さらには、附属学校の素晴らしい先生方に出会えたことは、幸運なことでした。先生方の実践に啓発され、山積する問題を解くカギを見出すこともできました。先生方との出会いも、忘れぬ思い出として、わが胸の奥にしまっておこうと思います。

思い出深き、そして、数えきれないほど多くの方々からお世話になった附属学校教育局を去るに当たり、先導的教育拠点を中心に、法改正に象徴される改革、特に教育改革が、平和な、幸せに満ちた日本を築き、国際社会に貢献できる子どもたちを教育することに資するものであることを実証して下さることを心より願っております。

私は、教職人生の最後の6年間を、筑波大学でお世話になりました。これまでを振り返ってみると、就職してからひたすら走り続け、気が付いてみると40年が経過していたというのが偽らざる心境です。学校の教師として13年間、行政の職員として15年間、校長として12年間、障害のある子どもにかかわってきました。皆様方がご存知のように、昭和48年9月29日に「国立学校設置法等の一部を改正する法律」が成立しましたが、この法律により同時に誕生したのが、私が最後にお世話になることになった筑波大学と本校の前身である国立久里浜養護学校であることに、不思議な巡り合わせを感じます。筑波大学の附属学校としての6年間の校長としての最大の課題は、我が国で唯一の知的障害を伴う自閉症児のための学校である久里浜養護学校（現：久里浜特別支援学校）をいかに軌道に乗せ、全国のモデル校にしていくかでした。幸いにも、この期間、文部科学省の研究開発学校の指定を2期連続して受けることができ、筑波大学の附属学校教育局や障害科学系の先生方等に多くの御支援を受けることができました。これにより、本校が開発することができた「養護学校における知的障害を伴う自閉症児を教育する場合の自立活動」の内容等が、今回改訂された特別支援学校の学習指導要領等における自立活動の内容や指導計画の作成と内容の取扱いに生かされることになりました。今後、新しい自立活動が特別支援学校等で展開されることにより、全国の障害がある子どもたちの社会参加と自立が一層進んでいくことが大いに期待されます。このように最後の6年間、全国に大きな影響を及ぼしていくという附属学校としての重責を果たすことができたのは、ひとえに附属学校教育局をはじめとする筑波大学の皆様方の御支援のおかげです。皆様方に深く感謝するとともに、今後の御発展を心から祈念申し上げます。